

# 君と出逢って 3

*J u n n a & T a k a n e*

---

井上美珠

*Miju Inoue*

*eternity*



エタニティ文庫

# C o n t e n t s

君と出逢って3 5

書き下ろし番外編  
非日常でも愛してる 343

君と出逢って3

## プロローグ

ばかりと目が覚めたら、外は明るかった。もうすでに昼に差し掛かろうという時間。はつきり言って、寝過ぎた。ベッドの隣を見ると、当たり前だが誰もいない。

「貴嶺さん、仕事行つたんだ」

寝ぼけながら言って、純奈はよいしょ、と起き上がる。ふと見下ろした身体は裸だ。さらに、あちこちに赤い痕が散らばっている。

「鬱血、すご……もう、やだ……貴嶺さん」

たちまち昨夜の行為を思い出し、純奈の顔が赤くなる。

今日も朝早くから仕事だというのに、旦那様は日付が変わるまで純奈を愛した。いたるところを唇で愛撫されて、なんというか食べられるみたいな感じだった。

「うう……新婚って、みんなこうされるもの？」

独り言をつぶやきながら、純奈は再び枕に突つ伏す。いくら七年分大人とはいえ、旦那様はもう少し純奈が若葉マークであることを考慮して欲しいものである。

——高橋改め、新生純奈。

結婚して、そろそろ三ヶ月になろうかという新婚である。

旦那様は新生貴嶺。親戚でハトコでもある彼とは、出会ってまだ半年も経っていない。そんな彼と、純奈はお付き合い期間もなくいきなり結婚した。

しかも、新婚生活の拠点は日本ではなくドイツだったりする。

なんでそんなことになったかと言えば、旦那様が特殊なお仕事をしているから。彼のお仕事は外務省に勤務するキャリア外交官。

純奈にプロポーズした直後、貴嶺のドイツ赴任が決まってしまったのだ。

ドイツ語はおろか英語も話せない純奈にとって、海外生活に不安がなかったと言える嘘になる。けれど純奈は、結婚して彼に付いていくと決めたのだ。

大人で素敵な旦那様を好きになってしまったから。

## 1

つい先日、楽しみにしていたフランスの新婚旅行中に、純奈に内緒で元カノと会っていた旦那様。いくら仕事で必要なことだったとはいえ、純奈は腹が立って、同じくらい

悲しくて、新婚旅行を切り上げ一人日本に戻ってしまった。

しかし、距離を置いて冷静に考えてみれば、自分の至らなさばかりに気付かされてさらに落ち込む羽目になった。そんな純奈を旦那様は日本まで迎えに来てくれたのだ。いつも忙しく世界中を飛び回っているのに、純奈を迎えに行くためにだけに仕事に都合をつけて……

『帰ってきてください、純奈さん。あなたがいないと、俺の人生は成り立たない』

口下手な旦那様が伝えてくれた言葉に、純奈は強く胸を打たれた。

たとえ思っていることの半分も伝えられなくても、仕事ばかりで一緒にいてくれなくても、やっぱり純奈には貴嶺しかいない。

これからもきつといろいろあるだろうけれど、純奈は決めた。貴嶺と一生を生きていくと。お互いに努力をして大事にし合っていくのだと。

そうして、日本からベルリンに帰ってきて、一週間ほどたったある日——  
毎日夜遅くまで働いている貴嶺が、珍しく夕飯時に帰って来た。

一人で夕飯を食べることが多くなっていたとはいえ、もちろん純奈は二人分の食事を用意している。急いで夕食を準備して、着替えてきた貴嶺と久しぶりに一緒に夕食となった。

「え……パーティー？ 私も、ですか？」

「ええ、純奈さんも、です。夫婦で招待を受けたので」

食事を始めてからしばらくして、貴嶺が躊躇いがちにそう切り出してきた。

旦那様は仕事の関係上、様々なパーティーに出席しなければならぬ。純奈からすれば「なんで？」と思うが、それも大切な外交の仕事なのだという。

それに、外国のパーティーでは、妻帯者は必ず妻を同伴するものらしいのだ。

もちろん純奈は、妻として彼を支えたいと思っている。でも……

「どうしても、ですか？」

貴嶺と結婚してから、純奈も一度だけ彼とパーティーに出席したことがある。だが、はつきり言っていない思い出がない。だからか、パーティーの同伴と聞くとつい尻込みしてしまう。

すると、貴嶺は無表情のまま言った。

「はい。夫婦で招待してくれた主催者の面子は潰せません」

「そう、ですよね……」

桐瑚も真綾を連れて行きます」

真綾というのは、貴嶺の同期で親友でもある仲野桐瑚の奥さんだ。つい最近、三人目の子供を産んだばかりである。純奈は、子供が生まれる少し前に、桐瑚の家に招待され、真綾の手料理を振る舞ってもらった。とても料理上手で美人の奥さんなのだ。

「真綾さんも? ……でも、子供たちは? 赤ちゃんもいますよね?」

「その日は、ベビーシッターを雇うそうです」

「そうまでして行かなきゃならないのか、と純奈は衝撃を受ける。

「俺が結婚したと知っての招待です。あなたがいないと、支障をきたします」

旦那様の言い方は、とても事務的で端的。口下手だというのはわかっているけれど、なんだか一方的に命令されているように感じてしまう。とはいえ、これも貴嶺の奥さんである純奈の務めだ。

「わかりました……パーティーはいつですか?」

「三日後です。あと、急で悪いんですが、その一週間後に、日本へ出張することになりました」

「ええっ!?!」

何それ、と思いつつながら貴嶺を見る。いつものこととはいえ、パーティーやら、出張やら、あまりに突然過ぎる。どうしてもっと早く言ってくれないのかと、純奈は唇を噛んだ。

でも、これが旦那様の仕事なのだ。もしかしたら彼も、急に言われて困っているかもしれないのだから。純奈は内心のモヤモヤをぐっと我慢して返事をした。

「わかりました。パーティーの準備と一緒に、荷造りもしておきます。期間はどれくらいですか?」

「一ヶ月から一ヶ月半くらいの予定です」

この前、荷物を片付けたばかりなのに、と思いつつながら内心ため息をつく。

「それと、三日後のパーティーですが、古橋事務次官が、純奈さんのドレスを選ぶと言っています。すみませんが、明日は彼女と一緒に買い物に行ってください」

「えっ? あの、古橋さんって、私、会ったことない方ですよね?」

「古橋ルリコ事務次官は、俺が入省した時から、良くも悪くもお世話になっている上司です。すみませんが、明日は失礼のないようお願いします」

だからそうやっていきなり言うけれど……

妻とはいえ旦那様の言うことを、なんでもはいはいとは聞けないんだけど。そんなことを考えながら、純奈は貴嶺を無言で見つめた。

「純奈さん? どうかしましたか?」

「……私は、三日後、貴嶺さんの仕事についてパーティーに出席し、その準備として、明日は古橋さんとドレスを買いに行けばいいんですね。あとは、日本へ行くための荷造りですか?」

つい強い口調で言ってしまうと、目の前の貴嶺がパチパチと瞬きをした。そして彼は、テーブルの上の純奈の手に手を伸ばす。それを、純奈はすっと手を引いて避けた。

「純奈さん、怒ったんですか?」

旦那様の言うことを聞くのは、妻の務めとわかっている。だけど、あまりにも貴嶺が淡々と事務的に言うものだから、妻の立場までなんだか事務的に思ってしまったのだ。

「怒ってません……ちゃんと、貴嶺さんの言う通りにします」  
すると、再び貴嶺が手を伸ばし純奈の手を強く握ってきた。

「すみません純奈さん。俺の言い方が悪かったです。一方的に言い過ぎました」

こうやって貴嶺は、いつも先に純奈に謝る。折れるというか、非を認めるといふか。

結局、ちよつと腹を立てても、すぐにその怒りが治まるようなことを言われてしまうのだ。だから純奈も、冷静になって貴嶺の事情を考えられるようになるのだが。

「私こそすみません。この間、妻として至らない自分を反省したばかりなのに」

「いえ、俺の言い方が悪かったです」

そう言って貴嶺が頭を下げる。そんな旦那様を見ていると、いつまでたっても子供っぽい自分に自己嫌悪を覚えてしまう。なんでもわかり合える夫婦になるまでには、まだまだ時間がかかりそうだと思う純奈だった。

☆ ★ ☆

――翌日。

貴嶺から、午前十一時くらいに上司が家に迎えに来ると言われていた。

そして、きっかり十一時に家のインターホンが鳴る。純奈は急いで玄関に向かい、一度深呼吸してからドアを開けた。

「はじめまして、参事官夫人。古橋よ。今日はよろしく」

そう言ってニコリと笑うのは、五十歳前後に見える自信に満ち溢れたキャリアウーマン。

洗練されたパンツスタイルで、ネイビーストライプのカシクールブラウスがよく似合っている。ブランド物のサングラスを外す仕草もかっこよく、とてもキレイな女性だと思う。

「はじめまして。純奈です。いつも夫がお世話になっています。こちらこそよろしくお願ひします」

恐縮しながらぺこり頭を下げた純奈は、頭を上げつつ控えめに申し出た。

「でも……あの、私のことは、純奈と呼んでください。その、ただの専業主婦ですし」  
参事官である貴嶺の妻なのだから、間違っではない。でも、参事官夫人と呼ばれるのは落ち着かないのだ。そこで純奈は、先日会ったドイツ大使夫人の優香の言葉を思い出す。

『大使の奥様、なんて呼ばれると偉い人のように思えるから好きじゃないの』

本当にその通りだと思う。

「そうね。参事官は新生だもんね、純奈さん」

古橋の反応は、ビックリするほどさっぱりしていた。純奈は官舎の部屋にカギをかけると、古橋に向き直り頭を下げる。

「あの、迎えに来ていただいてありがとうございます。えっと、今日はどこに行くんですか？」

「お買い物よ。とりあえずブランド街に行つて、パーティードレスを見繕いましょう」  
そうして古橋は、先を歩きながら再びサングラスをかける。

「あの、できれば、なるべく控えめなドレスが……」

「ダメダメ。それだけ胸がデカいのに、強調しないなんて馬鹿よ。新生の隣に立つて、かつ外国人に引けを取らないような、露出のあるドレスを着ないとね」

彼女はエレベーターの中でそう言つて、楽しそうに笑う。

「……貴嶺さんの隣にいたら、確かに私は地味ですけど……」

なにせ旦那様級の貴嶺は、モデル並みにスタイルがいい上、誰もが見惚れる超絶イケメンなのだから。

「でも胸はその、コンプレックスで……」

純奈の身体は、細身の割に胸ばかり大きくて、バランスが悪いのだ。

「コンプレックスって言うけど、胸が嫌いな男はいないわ。新生だって、毎日のように揉んでるんでしょう？」

——新生だって、毎日のように揉んでるんでしょう？

古橋の言葉が頭の中でエコーした。

「そ、そんな！ 毎日してるわけでは！」

真つ赤になつた純奈は、焦つておかしなことを口走る。だが古橋は、なんでもないような顔をしてさらに言った。

「あら、そう。新生、ちゃんとセックスしてるのね。あの男、一体どんなセックスをするの？」

その言葉に、純奈は目を丸くして古橋を見る。その直後にエレベーターのドアが開き、先に古橋が出て行く。その背中に思わず叫んだ。

「セ、セクハラですよ！」

言つてしまつてから、ハツとした。

『失礼のないようお願いします』

昨夜の貴嶺の言葉を思い出して、やつてしまったと青くなる。

「すみません、失礼しました」

急いでエレベーターを降りた純奈は、慌あわてて古橋に頭を下げる。



「あら、いいのよ？ ガールズトークを楽しんでるだけでしょ？」

少しだけ振り返り、古橋は笑顔でそう言ってくる。サバサバ、サッパリ、という感じの彼女に、純奈の方が面食らった。

古橋が車の前まで行き、純奈が助手席に乗るように促してくる。

純奈が助手席に乗って、気持ちを落ち着かせていると、運転席に乗ってきた古橋の視線を感じた。

「……あの？」

「それにしても、新生は随分と意外なところに落ち着いたわね」

意味がわからず目を瞬かせていると、古橋がオレンジピンクの唇でニコリと笑った。

「あれには目をかけてるの。だから今まで、新生の出世に役立つようないるんな女を近づけてきたわけ。それこそ、外務省の息がかかった女や、外国人の女なんかをね」

シートベルトを付けてエンジンをかけた古橋は、ちらりと純奈に視線をやった。

「新生が外務省に入省して付き合った女は、自然なふうを装って私が紹介した女ばかりよ。もちろん、秋元亜矢もね。だけど、誰一人、結婚まで行きつかなかった」

「……貴嶺さん、知ってるんですか？ 古橋さんが、そうやって女性を紹介してたこと」

「さあ、話したことないけど、気付いてたでしょうね。新生も、結婚相手は外務省と少なからず縁のある女だろうと思っていたはずだもの。そういうえば、そのうちの一人が今

本省にいるから、これから一緒に仕事することもあるかもねえ」

車を走らせながらそんなことを笑って話す古橋に、純奈は内心ため息をつく。

「元カノとの仕事は、もうたくさんです」

古橋から視線を外し、膝の上で揃えた手に力を入れる。

「あら？ 理解がないわね。新生は、わざわざ日本まであなたを迎えに行ったというのに」

ドキッとして、純奈は運転席に座る古橋を見た。

「私はなんでも知ってるわけ」

古橋は表情を変えず、慣れた様子で車を走らせる。

「新生が奥さんを迎えに行くという個人的な理由を優先させた仕事に、私は目を瞑った。あの仕事人間にそこまでさせた奥さんも、きちんとすべきだと思っただけ……違うかしら？」

古橋のきちんとすべきだという言葉は、純奈の胸にぐざりと刺さった。

あの時の貴嶺は、ただ仕事に忠実だっただけだ。なのに、それを理解できなかった純奈が、勝手に拗ねて怒って日本へ帰ってしまった。

「古橋さんは……私が貴嶺さんの奥さんなのが、不満ですか？」

「うーん、そうねえ……そうだとさえ言えそうだし。そうでもないと言えそうでもないし」

古橋はチラッと純奈を見て、ふふ、と笑った。

いつの間にか、車は街中のオシャレな店舗が多く立ち並ぶ道を走っている。しばらくして、古橋は店と店の間にある駐車場に車を停めた。そして、サングラスを外して純奈の方を向く。

「全てを理解しろとは言わないけれど、新生の妻はあなたであって、その他ではないの」古橋は純奈を真剣な眼差しで見据え、言葉を続けた。

「たとえ紙切れ一枚の契約だとしても、あなたが新生という姓を名乗り、新生に寄り添って暮らしているのは、その契約があるからこそ。あなたはたった一人、新生が婚姻契約をした相手なのに、仕事先で会うだけの元カノにどうして嫉妬をする必要がある？ 誰に何を言われようと、誰が新生を好きであろうと、新生の選んだ妻はあなただけなのよ」

「……それは、そう、ですけど」

純奈が答えると、古橋は首を傾げて鼻で笑った。

「新生には、これからもっと国の重要なことを任せていくつもりなの。それに寄り添うんだから、あなたは元カノなんかより気にしなきゃいけないことがあるんじゃない？」  
よくわからなくて目を瞬かせると、古橋は笑みを消し、まっすぐ純奈に人差し指を突きつけた。

「あなたが新生の元カノなんかを気にして、新生の妻であることを怠ったり、仕事の障害になるようだったら、私は迷わず離婚させる。そして新生には、仕事に有利な女を用意する。——いつまでも理解のないお嬢さんでいるつもりなら、私はあなたを新生の妻として認めないから。わかった？」

思いがけない強い言葉に息を呑む。何も言い返せず、純奈はその場で俯いた。

この人だったらやりそうだ。というか、純奈は昨日もパーティーの出席を渋ったし、いまだにドイツ語はおろか英語も満足に話せない。これでは、本当に離婚させられるかもしれないと不安になる。

「という、厳しいことを言うのは、これで終わり」

「え？」

古橋の明るい声に、純奈はきょんととして顔を上げた。

「私はあなたに新生の傍にいて欲しいわけ。そのために何をするかという話よ。とりあえずは、どんなに言葉が不自由だろうと、あなたは必ず新生と一緒にパーティーに出席すること。綺麗に装うこと。あとは周りをよく見ることね」

ひとつずつ言い聞かせるように言った古橋に、にっこり笑いかけられ、純奈はぎこちなく頷く。

「それじゃあまず、ドレスアップが必要ね。二日後のパーティーは気さくなものだから、ドレスは膝丈で大丈夫。あなた鎖骨が綺麗だし、ビスチェドレスにしましょうか」

そう言って車を降りる古橋に続き、純奈も車を降りた。

ビスチュエドレスというのは、ウエディングドレスとかでよく見る両肩の出た胸の上で留めるドレスのことだろう。あんな胸を強調するドレスなんて、純奈に着れるはずがない。「それは、ちょっと。露出をしたくないので……」

「有無は言わさない。新生にヤキモチを焼かせるくらい、露出して綺麗になるのが目標よ」古橋は旦那様の上司であり、彼女の言葉に純奈は逆らえるはずもない。

先を歩く古橋の後に続きながら、純奈は重いため息を零すのだった。

☆ ★ ☆

パーティーのたびに買うとドレスだらけになってしまし、値段もそれなりにするものだから、と今回のドレスはレンタルになった。

ドレスのデザインは、どうにか古橋を説得してビスチュエではなくホルターネックにしてもらった。とはいえ、胸のあたりはガッツリV字に開いているのだが。

ドレスのレンタル期間は一週間ということで、純奈はそのまま家に持って帰った。

このドレスを見たら、旦那様はどう思うだろう。なんとなく貴嶺の反応が気になったが、その日は彼と会うことはなかった。

『今日は遅くなります。先に寝ていてください。明日も遅くなります』

相変わらずの、事務的で端的なメールを読みながら、純奈はため息をつく。

じっくり見られずに済んでほっとした反面、この調子だとパーティー当日まで顔を合わせないということになりそうだ。

純奈は、今回のパーティーについて詳細を知らされていない。貴嶺が結婚しているのを知って招待されたと言っていたが、純奈は何もしくずしいのだろうか。

そう思って、それとなく古橋に聞いたら、言葉がわからないなら新生の傍にいればいいと言われて、それ以上聞けなくなってしまった。純奈がドイツ語はおろか英語も話せないのが問題だと言われている気がする。

最近では、簡単なドイツ語の日常会話くらいならできるようになってきたけれど、英語は相変わらずからっきしで、ちょっと落ち込んでしまう。

でも落ち込んだところで、一人でどうにかするしかない。旦那様は忙しいし、相談できる相手もないのだから。

こういう時、周囲に相談できる知り合いや、友達がいらないことを寂しいと思う。かといって、貴嶺に早く帰ってきてとは言えない。だって彼は、いつも仕事で帰れないことを謝ってくれるから。

いろいろ考えながら、その夜を過ごした。そうして翌日、貴嶺は純奈が寝ている間に出勤し、起きているうちには帰ってこなかった。結局、貴嶺と話すことなくパーティー

の日を迎えてしまう。

パーティーは夕方からで、仕事が終わったら貴嶺が自宅まで迎えに来ると言った。貴嶺が置いて行ったメモを確認すると、午後六時から開始と書いてある。

そろそろ準備しないといけないな、と時計を見ると午後の三時。メイクなどの時間を考えると、ぎりぎりの時間かもしれないと思い、純奈は着替えることにした。

借りてきたピンクベージュのホルターネックドレスに着替え、純奈はバスルームの鏡の前に立つ。実は古橋から、今日のメイクと髪の設定をしに来ると言われていたのだが、丁寧に断った。

それでも、以前勤めていた会社では、ちょっとしたレセプションパーティーに出席していたのだ。なので、その時の経験を活かしてメイクもヘアも頑張った。

ドレスは可愛いながらも、ガツリ開いた胸元がセクシーだったりするので、大人っぽさを入れて全体の雰囲気をもとめた。

最後にピンクベージュの口紅を引いて出来上がり。

そのタイミングで玄関のドアが開く音が聞こえた。純奈はパンプスを鳴らしてリビングへ行く。

「お帰りなさい」

ビシッとスーツを着た貴嶺は、ネクタイを緩めながら純奈を見た。二日ぶりに顔を見

る旦那様はやっぱりカッコイイ。やや疲れて見えるが、彼はそれを感じさせないためか口元に笑みを浮かべた。

「ただいま。もう着替えてたんですね」

「はい」

「俺も着替えてくるので、少し待っていてください」

領いて、そのままソファに座る。そうすると膝丈のドレスが一気に膝上十五センチくらいになってしまい、なんとなく露わあになった足の上にクラッチバッグをのせた。

十五分ほどして、寝室のドアが開き貴嶺がリビングに入ってくる。

「お待たせしました」

上着のボタンを留めながら歩いて来る貴嶺に、思わず見惚みとれてしまう。

ビジネススーツ姿の貴嶺もかっこよかったけど、パーティー仕様の彼はもう本当にカッコイイ。

チャコールグレーのスーツの中に、それより少し薄いグレーのシャツを着て、黒のジレを合わせている。赤のソリッドタイと同色のポケットチーフがいいアクセントになっていた。

先程までかけていた眼鏡はない。おそらくコンタクトをつけたのだろう。貴嶺は、まるでモデルみたいだった。

「カッコイイですね……」

ソファーから立ち上がりそう声をかけると、貴嶺は一瞬、驚いたような顔をした。「どうも」

モデル並みに背が高くスタイルのいい貴嶺は、硬そうな雰囲気ながら清潔感のあるイケメンだ。確かに彼なら、外国人に交じっても決して引けを取らないだろう。

だが純奈は、ごく普通の女であり、背もそんなに高くなければ容姿も十人並みだ。目ばかり大きな顔立ちには年齢より幼く見えてしまう。貴嶺のような素敵な大人の男の人と並ぶにはちよつとアンバランスかもしれない。こういう時、もつと美人に生まれていればと残念に思ってしまう。

「純奈さんこそ、綺麗です」

端的に抑揚もなく言われ、膝がカクツと折れそうになった。本当にそう思っているのか疑問なくらい表情が変わらない。それが貴嶺という人だとは思うけれど。

「無理に褒めなくていいですよ」

純奈は肩を竦め、ソファーの上のクラッチバッグに手を伸ばす。すると、温かい手が純奈の肩甲骨に触れた。その手に肩甲骨から項までを撫で上げられ、純奈は息を呑む。

「無理してません。綺麗です」

そう言うって、貴嶺は小さく音を立てて純奈の首の後ろにキスをした。

こういうところは、本当に外国人みたいだ。

「あ、ありがとうございます」

こんなことをされてしまうと、男慣れしていない純奈は後ろを振り向けなくなる。

どうしてこの人は、純奈が赤面するようなことばかり言ったり、したりするのだろうか。

「このドレス、古橋さんが選びました？」

貴嶺が、純奈の後ろにびったりと身を寄せながらそう聞いてくる。

「そう、ですけど。変ですか？」

「いえ。似合ってますが、純奈さんらしくないです」

言うや否や、後ろにいた貴嶺が純奈の前へ回り、正面から純奈を見つめてきた。彼は、再び純奈の首筋に触れ、その手を鎖骨に滑らせる。そのままガッツリ開いた胸元のV字のラインに触れられて、純奈の心臓がドキリと鳴った。それに気付いたのか、貴嶺は口元に笑みを浮かべる。

「いつもより目線が高いですね」

ああ、と思つて、純奈は頷いた。

「これくらいの高さが貴嶺さんと釣り合うって、古橋さんが。久しぶりに八センチヒール履きました」

片足を上げながら言うと、貴嶺が純奈の足を見る。

「おかしいですか？」

純奈は平均よりちょっと背が低いので、古橋の言う通りにしたのだが。背伸びし過ぎただろうか。

「いいえ。純奈さんの綺麗な足が強調されて、いいと思います」

そうして貴嶺は純奈の手を取り、行きましようと言った。

「え、もうパーティー会場へ？」

「ええ」

貴嶺に手を引かれるまま、玄関の外へ出る。

自然と手を繋いでくる旦那様にドキドキした。

手を繋ぐなんて今さらだけど、この人としか繋いだことがないから、余計だろう。

「ああ、そうだ。一度、大使館へ寄ります」

「どうして大使館へ？」

隣を歩く貴嶺を見上げる。

「古橋さんが来いと言ったので」

その言葉に、別の意味でドキドキし始める。なんだか、無性に嫌な予感しかない純奈だった。

## ☆ ★ ☆

大使館に着いた純奈たちを迎えたのは、すでにドレスアップした桐瑚の妻である真綾と古橋。

目が眩むようなセレブ、というのはいくつう人たちのことを言うのだろう。そう思うくらい、今日の二人は綺麗だった。

『五十点ね』

純奈の恰好を見るなりそう言った古橋に、真綾が困った様子で眉を寄せる。

もしかしてと思った瞬間、純奈は二人に大使館内の一室へ連行されてしまった。

まさに嫌な予感の中である。

そこで純奈は、ストッキングの色からヘアアレンジに至るまで古橋に指摘された。髪の毛はどうして美容室へ行かなかったのかと言われ、ドイツ語が上手く話せないのと答えると早く覚えるよう叱咤される。

その間、真綾は黙々と純奈の髪の毛にヘアアイロンとホットカーラーを巻いていた。

きつと貴嶺は、なぜ大使館へ寄るように言われたのか知らなかったのだろう。打ち合わせ的なものだと思っていたのかもしれない。

でも、実際は純奈の仕上がりを見るためだったのだ。いろんな準備がされていることから、まったく信用されていなかったのだとわかりガックリする。

古橋は純奈を椅子に座らせ、メイクを足していく。ちよつと垂れ目気味な純奈の目にくつきりとアイラインを引いてネコ目に仕上げた後、唇にキラキラ光るラメ入りのグロスをのせた。チークの色も少し足されて、キュートかつ色気のある純奈が出来上がる。

さらに大きく開いた胸元にもラメをつけられ、やたらと胸が強調される感じになった。情けないやら居たたまれないやら、複雑な気持ちで貴嶺のもとに戻ると、そこには先程はいなかった真綾の夫・仲野桐瑚がいた。

彼は純奈を見るなり、えっろ、とつぶやく。すぐに真綾に肩をドツかれていたが、純奈は超恥ずかしかった。まさに、穴があいたら入りたいという心境だ。

しかし貴嶺は、何も言わずに手を差し出しただけ。それはそれで不安になる。

ホテルの一室を借りきったパーティー会場に着いても何も言ってくれないので、つい何度も自分の恰好かっこうを見てしまう。それに気付いたのか、ようやく貴嶺が口を開いた。

「そんなに见なくても、とても綺麗です。キラキラしてます」

キラキラしているのはラメのせいじゃないだろうか。

しかし、キレイと言ってもらえたので、どうにか少し自信が持てた。口下手くちべたな旦那様らしいが、もっと早く言ってくれたらいいのと思ってしまう。

今日のパーティーは、どうやらドイツの有力者の誕生日を祝うものらしい。古橋たちも、その有力者と面識があるらしく、笑顔で談笑している。

純奈はいえ、その談笑の輪の中でただ笑っているだけ。時々わかる会話もあるが、わからない方が多い。そうしているうちに、貴嶺が純奈に声をかけてきた。

「純奈さん、少しここで待っていてください。真綾がいるから、大丈夫です」

パーティー会場に来てから、真綾はずっと純奈の傍にいてくれた。二人で話したり、パーティー主催者の奥様と話したりした。外国人との会話はほとんどが真綾の英語力によるもので、純奈はいちいち通訳をしてもらっていたのだが。

純奈が頷くと、貴嶺は会場の端にあるピアノの傍へ歩いて行く。

「貴ちゃんのピアノ、久しぶり」

真綾がそう言って目を輝かせる。

「えっと……貴嶺さん、今からピアノ弾くんですか？ どうして？」

「このパーティーの主催者で主役の方、クラシック好きだね。中でもピアノ音楽が一番好きなんですって。貴ちゃん、ピアノはプロ級でしょ？ だからリクエストこたに今から弾くの」

「貴嶺さん、ピアノ上手ですよね」

純奈が言うのと、うん、と真綾は満面の笑みを浮かべる。



「貴ちゃん、大学時代はスタジオミュージシャンのアルバイトやって、よく聞かせてもらったなあ」

真綾と貴嶺と桐瑚の三人は、大学の頃からの友人と聞いている。だから当然、真綾が純奈の知らない貴嶺を知っていてもおかしくない。

純奈はまだ、貴嶺と出会って半年も経っていないし、これから知っていく部分の方が多いのだ。そうは思っても、なんとなくモヤモヤしながらピアノの前に座る貴嶺を見る。ピアノの前に座りペダルの位置を確認する貴嶺は、絵になるほどカッコイイ。でも、なぜか、凄く遠い存在に思えた。もしかしたら、ここにいる人たちが自分より貴嶺のことを知っているんじゃないか。そんなバカみたいなことを考えてしまうくらい、今の自分がひどく場違いなように思えてくる。

貴嶺についても、彼の仕事についても、何も知らない純奈は、なんだか一人取り残されたみたいない気分だった。

## 2

滑らかに鍵盤すしばんの上を動く長くてキレイな指。ピアノを弾けない純奈は、あんな風に両

手で違う動作ができることに感心してしまう。

十八歳まで貴嶺にピアノを教えていたという人に先日会ったけれど、いつからピアノを習っていたかは聞いてない。

隣の真綾は、胸の前で軽く指を交差して曲に聞き入っている。彼女はその辺りのことも知ってそうだ。

貴嶺のピアノは、なんとというか音にブレがないように思える。それに、楽譜なしでも凄く弾き慣れている感じがした。

音楽のことはよくわからない純奈でも、そう感じるくらい貴嶺のピアノは素晴らしかった。

「Wonderbar!!」

曲が終わった瞬間、周りから盛大な拍手が沸き起る。「Wonderbar」はドイツ語で素晴らしい、という意味だ。

確かに素晴らしい演奏だったので、純奈も手を叩いた。

椅子から立ち上がった貴嶺は手を軽くピアノにのせて頭を下げた後、パーティー主催者の方を見る。主催者の男性は、貴嶺に近づき満面の笑みでハグをした。

しばらく何か話していた二人だが、やがて貴嶺が少し困ったような顔をします。不思議に思っただけだと、近くから声をかけられた。



「もう一曲何か、日本の曲を弾いてほしいって頼まれたみたいね」

見ると、いつの間にか古橋が傍に来ていた。

「新生、素晴らしいでしょう?」

そう言ってニコリと笑う。

「そう、ですわね」

七ヶ国語を流暢りゆうちゆうに話すくらい語学に堪能で、日本最高学府を卒業するくらい頭もいい。ピアノもプロ級の腕前だし、外国人に引けを取らない身長とスタイル、そして整った顔立ち。おまけに職業は外務省勤務のキャリア外交官だ。

「でもね、新生のちよつと出来るところを見たくらいで、すごい、なんて思われてちゃ困る。あなたは奥さんなんだから。これからもつと、自分の立場を考えて振る舞ってもらわないと。新生のお祖父様からも、よろしく頼むって言われていたしね」

たしか、お祖父さんも省庁にお勤めだったと聞いた。同じ国家公務員同士、何か繋つながりがあるのだろう。

「あなた新生のこと、何も知らないのね。結婚して知ることも多くあるけれど、せめて一年は付き合ってから結婚してほしかったわ」

古橋の言葉を聞きながら、純奈は視線を落とした。なんだか今日は、ずっとダメ出しをされている気がする。

貴嶺は外務省でも若くして役職付きになるくらい出世が早く、まさにエリートというやつなのだ。だからこそ、奥さんである純奈は貴嶺を支えて頑張らなくてはならない。なのに純奈は、そんな現実をまったく考えてこなかった。だから今、こんなことを言われているのだろう。

「古橋事務次官、もうそれくらいに。純奈さんは、まだ新生さんの奥さんになったばかりです」

横から真綾が擁護ようごするように言って、純奈の肩に触れる。

「誰しも最初は、わからないこと、知らないことがあります。事務次官もそうだったのではないですか? 外交官なんて特殊な世界は、普通に暮らしていたら知らないことばかりです」

真綾の言葉と、肩に触れている手が温かいと思った。

こうやって、純奈のことを思いやってくれる人もいるから、きっと大丈夫。

「ありがとうございます。私、頑張ります」

苦手な語学も、今よりもつと関心を持つとう。これからも貴嶺に寄り添っていくならば、語学は絶対に必要だ。それと、周りに目を配るのも忘れないでおこう。OL時代は、それを努力してやっていたのだから。

「そうね。あなたには頑張って欲しい。日本に帰ったら、またいろいろ教えるから」

そうして古橋がニコリと笑うのを見て、純奈もどうにか笑みを浮かべる。でも、笑うのがなんだかきつい。

なんでもないみたいに笑いながら内心ため息をついていると、ピアノの演奏が始まった。

常々、貴嶺の指は長くてキレイだと思っていた。その指が鍵盤けんぱんの上を滑なめらかに動く。素晴らしい演奏を終えた貴嶺が立ち上がり、先程と同様に軽く頭を下げるのを見ていた。

あちこちからかけられる声に返事をしながら、こちらに歩いてくる人は、確かに純奈の旦那様だ。なのに、なんだか違う世界の人のように思えて、気が引けてしまう。

「新生、よくやった。ありがとう」

古橋が笑顔で貴嶺に声をかける。

「いえ」

「じゃあ、私、交渉してくるから」

貴嶺と、いつの間にか近く立っていた桐瑚の肩をポンと叩いて、古橋はまっすぐパーティーの主催者へ向かって行く。背中が大きく開いたドレスは、古橋によく似合っていて本当にキレイだ。

なんの交渉か知らないけれど、貴嶺のピアノはそのきつかけを作ったらしい。古橋のよくやった、という言葉でなんとなくわかった。

「純奈さん、一人にしてすみませんでした」

そう言って正面に立つ背の高い彼を見上げる。そこにいるのは、表情のあまり変わらないいつも通りの旦那様。でも、先程までピアノを弾いていた人と同じと思うと、なんだか遠い人みたいだ。

「純奈さん、スイーツ食べる？ 私取ってくる」

笑顔で声をかけてくれる真綾に、ありがとうございます、と返事をした。きっと先程のことで、気を遣ってくれたのだろう。

「純奈ちゃん、ワインは？」

笑みを浮かべた桐瑚が純奈にワイングラスを差し出す。もしかしたら、彼もどこかで聞いていたのかもしれない。礼を言って受け取り、一口飲んでから近くのテーブルへ置いた。すぐに戻って来た真綾からいくつかスイーツの載った皿を手渡され、微笑んで礼を言う。

純奈は可愛いケーキの中から小さいシュークリームを選び、フォークで刺した。口へ入れると、優しい甘さが広がる。美味しくて幸せで——涙が一筋頬を伝った。

「う——……」

何事もなかったように古橋の前で振る舞っても、その実、かなり悔しかった。そして、同じくらい、何もわかっていなかった自分に落ち込む。

パーティーに参加し、ただ笑って話をするのも、頼まれてピアノを弾くことも、全ては外務省にとって必要な仕事なのだ。

『俺が結婚したと知つての招待です。あなたがいないと、支障をきたします』

貴嶺に言われた言葉を思い出し、どんなに気軽に見えてもビジネスライクなパーティーなのだと痛感した。

確かに、ここに純奈がいなければ貴嶺の仕事に支障をきたしていた。こういう場で、招待された奥さんが来ていないなんてことがあってはならない。真綾もそれをわかつているから、ベビーシッターを付けてまでこの場にいるのだろう。

古橋に指摘されるまで、そんなことにも気付けなかった純奈が悪いのだ。

だから、こんなところで泣いてはいけない。純奈はサッと頬を手で押さえ、涙を拭いた。そして、テーブルに置いたワインをごくごく飲んで、持ってきてもらったスイーツを黙々と食べる。最後に残っていたワインを飲み干した。

桐瑚と真綾は明らかに困惑した表情を浮かべている。そんな二人に軽く頭を下げて、純奈はテーブルにお皿とフォークを置いた。

「純奈さん？ どうしました？」

あまり表情の変わらない貴嶺の声にも、困惑の色が混じる。言葉は端的だし表情も動いていないように見えるが、声音がちよつと違うのが純奈にはわかった。いきなり奥さんが泣いたら、困惑するのも当然だろう。

「大丈夫です。すみません」

もう一度、大丈夫ですと言う純奈の頬に、貴嶺の手が伸ばされる。しかし、ちょうど古橋が戻って来るのが見えて、純奈は慌てて自分で頬を押さえて涙の跡を拭いた。

「交渉は上々だった。これも新生のおかげ。仲野、早速明日、書類まとめて……って？ まあ」

純奈の顔を見て、古橋は笑う。

「泣いてるの、子猫ちゃん？」

その言い方に、ムカツ腹が立った。先程の悔しさがぶり返してきて、思わず言い返してしまふ。

「私は子猫じゃなくて、目タヌキです。語学くらい、すぐに身に着けてやりますよ。それに、旦那様の出来るところ見て、凄いて思うのは、妻として普通の感情ですから。っていうか、この前から思ってたけど、旦那様の上司だからって、どれだけ偉いって言うんですか！」

そう一気にまくし立てた後、近くを通りかかったボーイのトレイからワイングラスを

取る。それを一気に飲み干して、テーブルに置いた。

冷静にと思うのに、そうできない自分がある。子猫ちゃん、なんて言われてしまう自分が悔しい。

純奈は一度息を吐いて気持ちを落ち着かせてから、再度古橋に向かって口を開く。

「ここはパーティーの場だ。雰囲気壊さないように声を抑えつつも、言いたいことを言った。」

「私がどんなに役に立たなからうが、放つといてください。貴嶺さんの妻は私です。たとえ紙切れ一枚の契約だろうが、私は絶対に別れたりしませんから」

はあ、と悔しさとともに息を吐き出し、古橋をキツと睨む。

「もう、本当に、クソババアですよ、あなたは！」

そう言って、純奈は踵を返した。

久しぶりに履いたハイヒールのパンプスのせいで足が痛い。でも我慢してカツカツ音を立てて歩いた。しばらく歩いたところに一人掛けのソファアを見つけ、純奈はそこに座る。周りに誰もいないのを確かめると思い切ってヒールを脱いだ。そのまま純奈は、ソファアの上で膝を抱える。

「貴嶺さんの上司に、クソババアって……なんてこと言っちゃったんだろう。もう……本当に別れさせられるかも」

ドレスをレンタルした日に、古橋に言われた言葉が脳裏をよぎる。

『新生の妻であることを怠ったり、仕事の障害になるようだったら、私は迷わず離婚させる』

離婚させる、という言葉がこんなにも胸に刺さっていたのだと思い知る。

簡単に離婚なんてさせられるわけがないにしても、純奈が妻としてもっと努力しないといけないのは本当だ。考えれば考えるほど、自分が貴嶺の妻としてふさわしくない人間のように思えてきて、泣きそうになる。しかし、ここで泣いてはダメなのだ。というか、さつきちよびり泣いてしまった純奈は、もうすでに古橋に負けている。

「くっせ！ バカ純奈！」

バチンと思いきり自分の頬を叩いた。化粧室へ行きたいと思う。きっと、猫目に仕上げられたメイクが、おかしくなっていることだろう。でも、メイク直しのための化粧品は会場に置いてきたクラッチバッグの中だ。

もう、本当にバカ、と思いいながら自分に腹が立つ。

純奈の中の、小さな負けず嫌いが顔を出す。そう、その負けず嫌いがあったから、O.L時代もなんとかやってこられたのだ。どんなに理不尽な嫌味や陰口を言われたりしても、仕事と割り切ってコツコツ頑張ってきたじゃないか。

貴嶺の仕事を支えるのが妻の仕事なら、同じように頑張ればいい。英語は凄く苦手だ

し、以前みたいにいろいろなものに気を配らなきゃいけないだろうけど。それが必要だ  
 というのなら……

「妻の仕事、か。貴嶺さんの奥さんを仕事に？」  
 「仕事にしなさいよ。新生貴嶺の傍にいる間は」

顔を上げると、目の前に古橋がいた。彼女は、近くからソファアを引っ張ってきて、  
 小さいテーブルを挟んで純奈の正面に座る。

「ハイヒールは楽じゃないわね。私も脱ぐわ」

そうして、古橋は靴を脱いだ足を小さなテーブルの上ののせた。その足は華奢でキレ  
 イだが、親指の形が歪んでいる。

「見て、この親指。ハイヒールを履いて仕事をし続けた結果、外反母趾よ。私の身長は  
 あなたより小さいくらいでね。外国人を相手に仕事するのに、あまり背が低いのもダメ  
 じゃない？ だから仕事の時は、低くて九センチ、高くて十五センチヒールを履いてい  
 た。痛くて血が出て、娘がお腹にいる時だって、私はそれを履き続けたわ」

ニコリと笑う古橋は、テーブルから足を下ろした。

「あなた、根性あるじゃない。私にクソババアって言ったのは、あなたで三人目よ。一  
 人目は新生。あなたみたいなクソババアは初めてですって静かにキレた。二人目は仲野  
 で、覚えてろよクソババアって結構怒り気味にキレたわね。あの二人は本当に仕事で

きるし、外務省でも抜きん出て出世が早いエリート。そして、三人目があなた。仕事が  
 できる人って、私にキレるのかしらね？」

古橋からそんなことを言われて、純奈は首を振る。

「……………私は、仕事のできる人じゃないです」

「あなた、以前は有名な会社で主任だったそうじゃない。老人ホームのデザインから、  
 家具や食器のデザインまで、幅広く手がけていたようね。あなたが企画提案したカフェ  
 のシヨッピングバッグ、私も持つてるんだけど、あれ、大好きよ」

貴嶺も知らないようなことを、なんでこの人が知ってるんだ。驚いて目を丸くする純  
 奈に、古橋は髪の手をかき上げながら艶然と笑った。

「課報活動は得意なのよ。伊達に外務省で出世してないわ」

ヒールを脱いだ足を組む姿が、なんとも色っぽい。古橋は純奈より二十歳以上は年上  
 のはずなのに、若々しくキレイでカッコイイ。誰もが憧れるキャリアウーマンだ。でも、  
 先程の言葉から、彼女にもいろんなことがあったのだと想像できる。

「あなたは、交渉上手だと思うのね。手がけた仕事の内容を見れば、そのことがよくわ  
 かる。外務省に来てれば出世できたかもしれないのに」

「……………そんなに頭はよくありません」

純奈は、膝を抱く手にぎゅっと力を込める。

「新生の奥さんとして、頭を使わないとダメな時もあるわよ？」  
そんなことを言われたって、と純奈は俯いた。

「どんなに仕事ができても、誰かに支えてもらわないときつい時もある。夜遅く帰ってきて、癒やしてほしい時もある。そういう時は、ただの奥さんに戻って。でもその他は、頭を使って一緒に考えて、新生の力になってあげて。周囲への気配りは、あなたの専売特許でしょ？」

そう言って古橋は脱いでいたパンプスを再び履いた。

彼女のパンプスは、確かに純奈のものよりヒールが高い。高いヒールは足の細さを際立たせ美しく見せるだろうが、履く方はかなりの我慢をしているのだろう。あの外反母趾は痛そうだった。

「じゃあね。新生が怒ってたから、そろそろ戻るわ。あいつ怒らせると怖いのよ」

来た時同様、あっさり背を向けて古橋が去って行く。

立ち上がった純奈は、ぴんと伸びたその背に宣言した。

「私、努力しますよ！ 貴嶺さんが好きですから。頑張ります！」

古橋は振り返らないまま、クラッチバッグを持った手を上げて軽く振る。その姿を見て、純奈はまた泣きそうになってしまった。

古橋がいろいろと純奈に言うのには、理由があるのだとわかってしまったから。

離婚させようだなんて、きつと最初から思っていない。

貴嶺の奥さんは純奈であり、純奈以外にはいない。じゃあ、どうする？ という話なのだ。

やっぱり落ち込むことは落ち込むけれど、頑張ろうと思うわけで。

純奈は足下に転がるパンプスを履いた。

足が痛い。

でもこれが、今の純奈にできる仕事なのだろう。

ひとつ息を吐いて、化粧室に行こうと歩き出したところで、低い美声に名を呼ばれる。

「純奈さん」

振り向くと、貴嶺がいた。

貴嶺は早足に、純奈の傍までやって来る。その手には純奈のクラッチバッグ。

純奈は貴嶺の手からクラッチバッグを受け取った。メイク直しをどうしようと思っていたので、持ってきてもらって助かった。

「パーティーは終わりましたか？ まだなら戻ります」

だが、貴嶺は大丈夫ですと言って首を振る。

「先程終わりました。桐瑚も真綾も、もうすぐ出てきます」

それを聞いて、無意識に肩の力が抜けた。

「……古橋さんから何を言われたのかわかりませんが、気にしないでください」  
その貴嶺の言葉に、カッチーンときた。

「もう、貴嶺さんのバカ！ 気にしないわけじゃないでしょう？ 私は古橋さんに言われたこと、めっちゃ悔しいし腹も立ちました。でもそれは自分に対してだし、きちんと受け止めないといけないことなんです。なのに、気にしないでなんて言わないでください。だいたい、貴嶺さんはいっつも言葉が少な過ぎるんですよ。人から私が知らない貴嶺さんのことを聞かされる、どうしようもなく悔しい気持ちなんて、貴嶺さんにはわからないでしょう」

一気にまくし立てて、はあ、と息を吐く。貴嶺を睨んで純奈はさらに言った。

「貴嶺さんは私に、して欲しいこととか、こういう時は傍にいて欲しいみたいなこと何ひとつ話してくれない。気にしないでと言うのは、私の力なんて必要としてないからですか？」

感情のままに思いをぶつけるが、貴嶺は瞬きを繰り返すばかりで何も言わない。こんな時まで普段と変わらない旦那様に、このヤロウな気持ちになってくる。

「わあ、すっこい。貴ちゃんが怒られてる」

貴嶺の向こうから、桐瑚と真綾がやって来るのが見えた。さすがに言い過ぎたかと、純奈は唇を噛んで俯く。

「というか、いつも、キレてしまう純奈のことを、貴嶺はどう思っているのだろう。もしかしたら、呆れ返っているかもしれない。だって、半分以上は八つ当たりのようなものだから。」

「にやお、何か言ったら？」

近くまで来た桐瑚が、貴嶺に声をかける。「にやお」というのは、桐瑚が貴嶺を呼ぶ時の愛称だ。彼のニヤニヤした表情を見て、面白がっているのがわかった。

対して貴嶺はといえば、やっぱり何も言わない。

「何も言わないのは、いつものことですよ。それでいて、毎回先に謝っちゃうから、私は反省してばかりです。いつもいつも、本当に至らなくて……」

自分で自分を責めながら、涙をぐっと堪える。これ以上泣いたら、目ダヌキならぬパンドになっちゃいます。

「純奈さん、面白いよねえ。でも、貴ちゃんも口下手過ぎよね。まあ、昔からだけど？」

「真綾、黙ってくれないか」

ようやく貴嶺が言葉が発したかと思ったら、真綾に対してでつい下唇を噛む。

「せっかくイイものあげようと思ったのに。貴ちゃん酷いねえ、桐瑚？」

「まったくだな。聞きしに勝るダメ男だねえ、にやお」

そう言って、桐瑚が純奈と貴嶺の間に一枚のカードを差し出した。



「このホテルの鍵。お節介とは思ったけど部屋を取ったから。仲直りも夫婦の愛を深めるのも、セックスでどうぞ」

純奈はカァツと頬が熱くなるのを感じた。

「し、しませんよ、そんなこと」

「えー。純奈ちゃん、しないの?」

桐瑚にニヤニヤ笑いながら言われて、もうそれだけで恥ずかしい。真綾も同じように笑っていて、この夫婦そっくりだと思ってしまう。

「し、しませんよ! そんな気分じゃないし。いろいろ考えることがあつて頭もいっぱいだし」

「そんな時こそ、すればいいのに。純奈さんしない? 楽しいのに」

さらにアダルトなことを言われて、純奈は恥ずかしさに首を振る。

「も、下ネタやめてください! 私、そういうの本当に慣れてないんです!」

純奈が焦れば焦るほど、真綾と桐瑚は声に出して笑っている。

だいたい、こんなお膳立てされた状況でお泊まりなんてできるわけない。純奈が真っ赤になっていると、横からスツと手が伸びてきた。

「確かにお節介だけど、ここは感謝して泊まらせてもらう」

えっ、と思った時には、貴嶺が桐瑚からカードを受け取っていた。それを見た純奈は

目を丸くして、思わず一步後ろに下がる。

そんな純奈の背中を、真綾が貴嶺に向かって押した。一瞬こげそうになり、純奈は咄嗟に貴嶺の腕に掴まる。

「ほらほら、行つてらっしゃい。仲良くね」

にこりと笑った真綾は、ウインクをして手を振った。そのまま桐瑚と腕を組んで、行つてしまふ。

「純奈さん」

名を呼ばれて純奈は貴嶺を見上げる。高いヒールを履いてもなお見上げる貴嶺は、やっぱり素敵だと思った。でもこの素敵さに流されてはダメだと、純奈は貴嶺を睨む。

「なんですか?」

「そんなに、怒らないでください」

「不満を口にしただけで、怒ってないです」

怒ってないという言葉に説得力はないかもしれない。貴嶺にイラついているのは確かだし。それに、考えなきゃいけないことがいっぱいなのだ。これからも貴嶺の傍にいたいし、そのための努力をすると決めたから。

「話したいんですが、部屋に行きませんか?」

カードキーを見せ、貴嶺が純奈を見つめる。



「……何もしませんよ?」

「そういうことは後で考えましょう」

貴嶺に手を取られ、少し引つ張られるともうダメで。ああ、もう本当に、この人には敵なわない。純奈は手を引かれるまま、エレベーターに乗り込んだ。

「私のこと、凄く面倒くさい女だって思ってますんか?」

「思ってますん」

端的に即答されて、なんだかその言い方が冷たく感じた。それ以上に、わざわざそんなことを聞いてしまう自分に落ち込んでしまう。

「純奈さん」

呼ばれたけど、顔を上げられなかった。いい大人が何をやっているのか。貴嶺と出会ってから、自分でも驚くほど子供っぽくなっている気がする。

いつの間にかエレベーターが目的の階に着いたらしく、貴嶺からそっと背を押された。「何号室ですか?」

エレベーターから降りたところで貴嶺に聞くと、何も言わずにカードキーを手渡される。

「古橋さんに、何を言われたんですか?」

「貴嶺さんには関係ありません。私の問題なので」

足早に目的の部屋へ向かうと、追って来た彼に顔を覗ぞき込まれた。

「純奈さん、言ってくれないとわかりません」

「大丈夫です。これは私の中で消化しないといけないことなので」

部屋の前に着き、カードキーを差し込む。なのに、何度繰り返してもドアが開かない。「もう、なんで?」

すると、カードキーを持つ手に貴嶺が手を添える。

「引き抜くのが早いからです」

次の瞬間、いとも簡単にドアが開いた。

どんな時も、旦那様は冷静である。純奈が不機嫌だろうがなんだろうが、いつも。そう思うと、なんだか悔しい気分になる。

無言で部屋の中に入った。後から入ってきた貴嶺を見上げて、やっぱり彼はイケメンだとほんやり思う。これからも彼の傍そばにいるために頑張ると決めたけど、なんの取り柄えいばもない自分が本当にこの人の支えになどなれるのだろうか。

やることはわかっていても、自信を無くしている純奈は上手うまく頭の中の整理ができていないでいた。

「純奈さん、すみませんでした」

「……何がですか？」

「古橋さんのことも、俺があなたにした、いろいろなことについてです」

もしかしたら古橋から何か聞いたのかもしれない。でも、貴嶺は純奈に何もしていない。「貴嶺さんが謝ることないです。私が一方的に貴嶺さんを責めたので。むしろ、謝るのは私の方です」

嫌な女に成り下がっている今の純奈は、もう本当に自分のことが嫌いだと思う。ここまで自分を嫌いになるのは久しぶりだった。

「パーティーに出席するのは、嫌だったのでしょうか？」

「そのことはもういいんです。これからは、パーティーがあれば、一緒に行きます」

純奈は手にしていたクラッチバッグをテーブルに置き、窮屈なパンプスを脱いだ。

「俺は……あなたがいないと支障をきたすなんて、心無いことを言っていました」  
そう言って、貴嶺は視線を落とす。

「貴嶺さんに対して怒っているわけじゃないんです。ただ、自分が恥ずかしいとか……。外交官の奥さんなのに、いつまでも語学がからっきしなんて。甘えていた自分に落ち込んでいるんです」

そう、単に気持ちの整理がついていないだけ。これから一体どれくらい頑張らなくてはいけないのか。マイナスからスタートする自分に、つい途方に暮れてしまう。

「でも、頑張ります。貴嶺さんみたいに七ヶ国語は無理ですけど、せめて英語くらいはしっかり話せるようになります。貴嶺さんが連れていて、恥ずかしくない奥さんになりますから」

「俺は、恥ずかしいなんて思ったことはありません」

貴嶺の目が純奈の全身をじっと見ている。途端に今日の恰好が恥ずかしくなって、無意識に胸の前で手を組む。

「今日のパーティーも楽しめました。仕事中に不謹慎とは思いましたが、綺麗に着飾ったあなたと、デートしているような気持ちになっていたので……」

楽しみにしていたなんて知らない。旦那様は口下手だと自分で言うけど、本当にそうだ。貴嶺が歩み寄り、そっと純奈の腕に触れる。胸の前で組んでいた手をゆっくりと解かれ、両手を繋がれた。

「すみません。やっぱり上手く言えない。でも俺は、何があるうとあなたのことが好きです」

何度貴嶺に好きと言われただろう。不変の言葉なのに、凄く胸に響く。

「俺の人生は、あなたがいないと成り立たない。あなたがいてこそ、人生です」

純奈が一人で日本に帰った時、電話でそう言われた。でも面と向かってだと、嬉しくて心が震える。

## 立ち読みサンプル はここまで